

令和2(2020)年度

日本特別活動学会 第7回 実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 7-5

中学校の生徒会活動による実行委員会を中心とした学校生活の向上
を目指して

(愛知県)みよし市立三好中学校

村瀬 悟(ムラセ サトル)

実践テーマ	中学校の生徒会活動による実行委員会を中心とした学校生活の向上を目指して
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・ <u>生徒会活動</u> クラブ活動 <u>学校行事</u> その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	<p><実践事例の背景と意義></p> <p>「自分たちの学校生活は自分たちの手で創る、それが一番楽しい」こうした学校生活を目指して、平成25年度から生徒会規約を改定し、生徒議会／生徒総会を中心とした生徒会活動を行ってきた。同時に、生徒会活動の一環として生徒一人一人の希望で参加する“実行委員会”の形態で学校行事を展開し、より生徒の主体性を重んじた学校行事を展開してきた。</p> <p>本実践は、現在(令和2年度)にも継続され、多様な展開を続ける“実行委員会”がもつ、「社会の形成者」を育む実践の可能性を拓く試みである。</p> <p><方法></p> <ul style="list-style-type: none">・生徒会活動の一環としての制度化 すべての生徒会活動は生徒議会(または生徒総会)で提案・審議され、可決されることで初めて実践することができる。この制度下であれば実行委員会を全校体制で募集し、実践することができる制度にしている。委員会(生徒会役員会や学年運営委員会なども含む)レベルでの提案も実現可能な環境整備と担当教員らとの共通理解により、生徒がより自由な発想で活動を提案している。・自己有用感を高める活動への価値づけ 活動にやりがいを得なければ活動の楽しさは得られない。ただ行うのではなく、参加者の成長・自己有用感を高めるための手だて「ライフスキルアップカード」等を作成した。
実践の時期	平成25年4月～令和3年3月現在

【実践事例】（成果と課題を含む）

1 生徒会活動の流れ（立案→生徒議会で検討・承認→運営）

平成 25 年度、これまで委員会代表者が参加せず、生徒会役員と学級代表者が情報交換するのみだった生徒議会議会を改定し、右図のように生徒議会議会が全委員会、学級代表者（学年運営委員）が参加し、各々の活動案を提案・審議して実行する制度を設けた。

このことにより、それぞれの活動案を自分たちの手で改善、向上を図りながら主体的に全校へと浸透させていく契機となった。

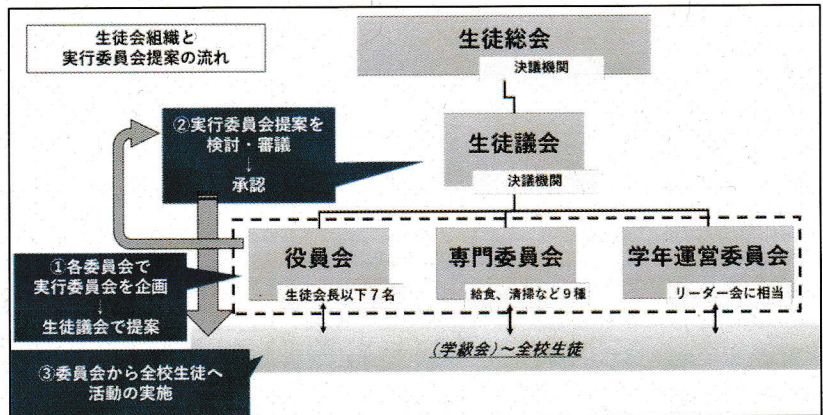


図 1 生徒会組織と実行委員会の流れ

2 実行委員会の運営

上記の運用による生徒会活動を用いて同年、文化祭を成功させるための実行委員会を生徒会役員による立案のもと生徒議会議会で提案した。これ以降、各種全校へ発信する実行委員会の運営モデルとなった。

<実行委員会活動の流れ>

① 企画～募集（立案→生徒議会議会→承認→募集）

各委員会等で実施したい計画を立案し（活動組織、計画、募集人員含む）、生徒議会議会で提案する。生徒議会議会の審議を経て可決されることで、対象生徒（文化祭では全校生徒）へと募集を開始する。呼びかけは議会議会参加者の各学級の学年運営委員が教室で呼びかけたり、ポスター、放送、全校集会等で行う。なお、教員間での提案は委員会立案前に済ませておく。

② 運営（準備活動→当日の活動→事後の振り返り）

参加者が決定すると、全体オリエンテーションを行い、活動に入る。それぞれの活動内容に合わせ、実行委員会活動を展開する。活動時間帯は朝の始業前や部活動のない月・木曜日の授業後に開催されることが多い。活動の規模の大きさに応じて実行委員会活動は 2 か月前後の期間におよそ 4~5 回開催している。

③ 活動の価値づけ

実行委員会は希望者が参加するが、慈善活動ではない。参加する生徒には、活動の成功のために協力する楽しさを得るだけでなく、生徒自身の自己成長を図る場として活用して欲しい。そのためのセルフチェックシート「ライフスキルアップカード」を作成し、自己分析から相互評価を通して自身の成長を捉える機会として価値づけた。

④ 事後アンケート

実行委員会活動の効果を検証するために事後アンケートを行っている。学校行事の自己評価（全校生徒（年に 1 回））や学校評価（全校生徒の意識調査（年 2 回））、令和元年度からは参加者への事後アンケートへと少しずつ形を変化しながら活動を評価して改善を図っている。

3 平成 25 年度からの活動の展開

平成 25 年度以降、教員が主導して開催してきた学校行事を皮切りに、以下のような活動が実行委員会の形態へ変更していった。（下線部は新たに開催された活動、（ ）内は提案した組織、令和元年度、令和 2 年度も記載を省略しているが体育祭、文化祭、中学校説明会、3 年生を送る会の実行委員会活動を行っている。）

(1) 実行委員会の変遷

- 平成 25 年度 文化祭（生徒会役員）、3 年生を送る会（生徒会役員）
- 平成 26 年度 体育祭（生徒会役員）、文化祭、3 年生を送る会
- 平成 27 年度 体育祭、文化祭、中学校説明会（生徒会役員）、3 年生を送る会
- 平成 28 年度 地域清掃美化活動（清掃委員会）、体育祭、文化祭、中学校説明会、3 年生を送る会
- 平成 29 年度 体育祭、文化祭、中学校説明会、3 年生を送る会
- 平成 30 年度 体育祭、文化祭、中学校説明会、3 年生を送る会 スマイル美化活動（清掃委員会）
- 令和元年度 学習交流会（2 年学年運営委員会）、地域あいさつ運動（生活委員会）
- 令和 2 年度 ※「花き」を届けよう project（3 年学年運営委員会）※休耕期間中のため生徒議会議会提案なし

(2) 各種事後アンケート結果

①平成 27 年度と平成 29 年度の比較

全校生徒に特別活動の振り返りの一つとして学校行事の自己評価アンケートを年に 1 回（2 月末）に行った。そのうち、図 2 に示すように年間を通して実行委員会に参加した生徒と一度も参加していない生徒を比較したところ、行事に対する充実さや楽しさ、参加姿勢などの項目で平成 27 年度では実行委員会経験者の方が上回っていた。その 2 年後の平成 29 年度の調査では、実行委員会に参加していない生徒の状況も改善されていた。実行委員会活動の経験者が参加していない生徒集団への良い影響を与えていることが推測された。

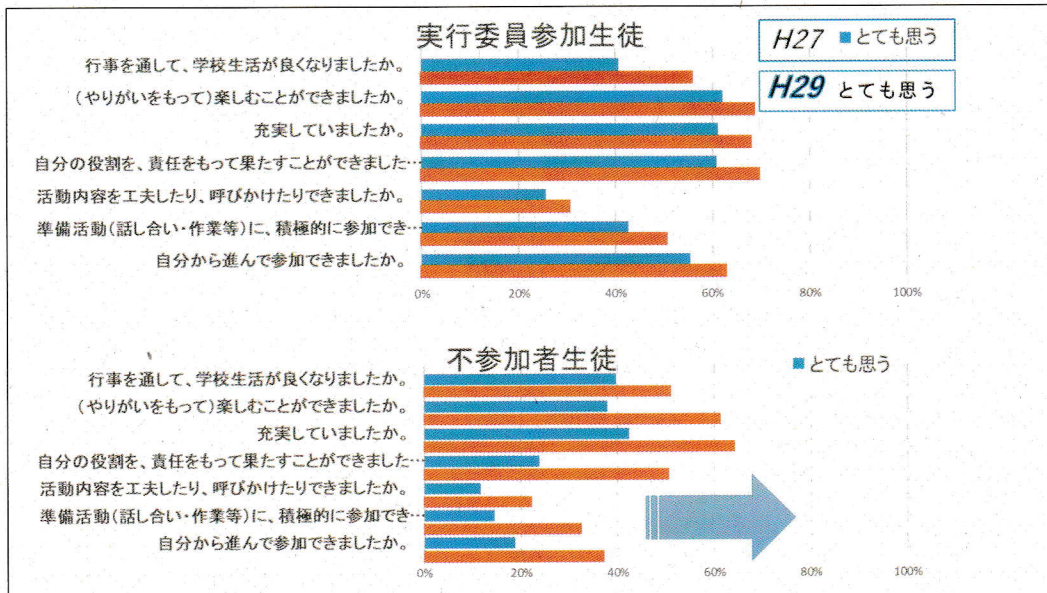


図 2 実行委員会の参加の有無による自己評価の違い

②生徒の意識調査

全校生徒へ学習面、生活面などの意識調査を行っている（令和 2 年度現在では学校評価の質問項目になっている）。平成 28 年度から平成 30 年度の様子を図 3 に示す。

「誰かの役に立ててうれしい」項目が実行委員会が関係性があるとはいえないが、実行委員会で諸活動を成功させることが人のためになっていることを考えると、この調査結果を参考にして振り返る必要がある。

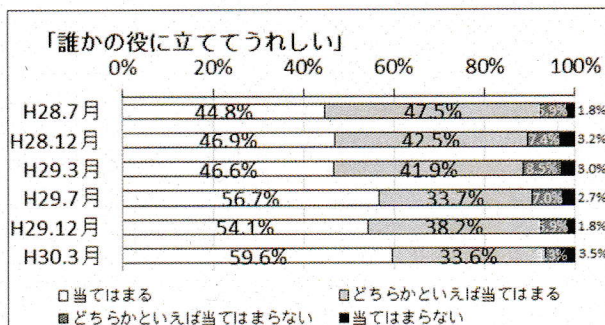


図 3 生徒の意識調査

③実行委員会の事後アンケート

平成 31 年度（令和元年度）になると、小学校との学習交流など実行委員会の種類が多様に、かつ活動過多の状態にもなってきており、活動の精選の段階にも入ってきた。そこで多様な実行委員会活動が参加する生徒にどのような影響・効果を及ぼすのかを検証するために共通した事後アンケート（図 4 参照）を実施し、比較検討の材料としている。

この項目には、自分自身の成長の様子や、実行委員会に期待すること、活動の意義などを質問している。より生徒の目線で行事を評価することを目指している。

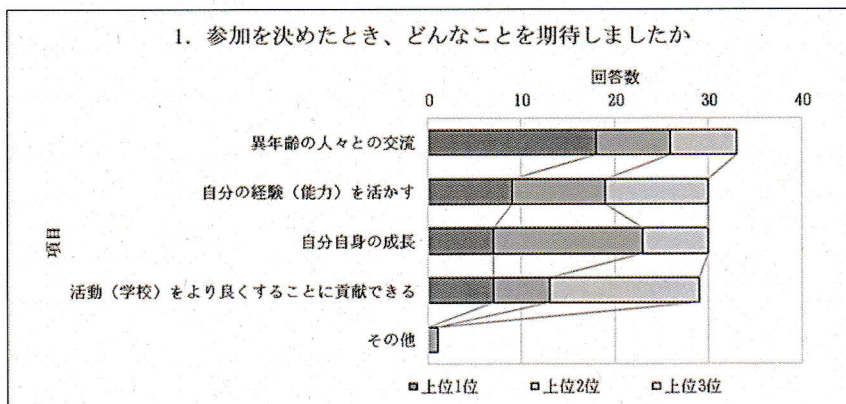


図 4 実行委員会事後アンケート（令和元年度 学習交流会）

(3) 実行委員会活動の価値づけ

実行委員会活動は善意や好意など、良心の部分が作用して参加することが多く、慈善活動として見られることもある。そこで、実行委員会に参加することで自身の成長を図ることができる価値づけを考え「ライフスキルアップカード」を作成した。

このカードを用い、自身の活動の動機から自身の成長させたい汎用的能力（見通しを持つなど）の強化を図る。その見取りとして担当教員と仲間からの相互評価を行い、自身の成長や頑張りを認めあう取り組みとしている。

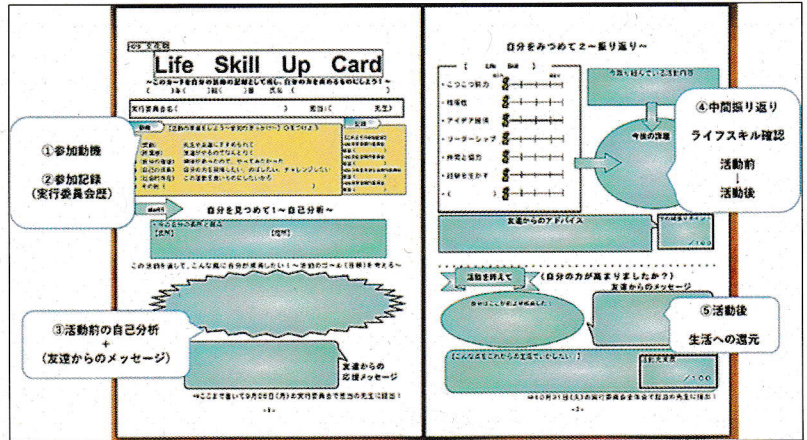


図 5 ライフスキルアップカード

(4) ライフスキルアップカードの変容 (令和元年度 学習交流を例に)

カードの成長させたい力の部分をまとめたものを図6に示す。

一人一人が活動を通して成長させたい部分を視覚化し、活動に対する具体的な行動につなげられるように配慮している。

右図6の学習交流では「リーダーシップ」以外のすべての項目で有意差がみられた。

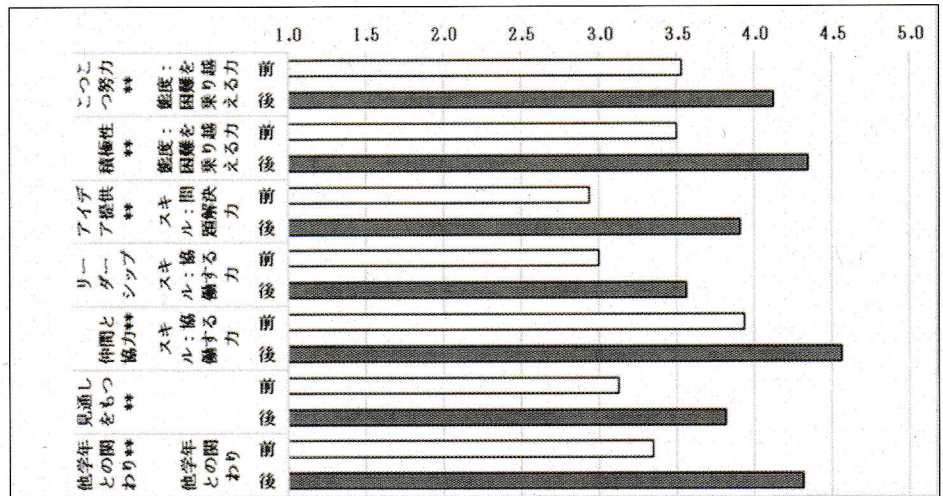


図 6 ライフスキルアップカードの変容の様子 (令和元年度 学習交流)

4 実行委員会活動の展開

年度が進むにつれ、教員主導→生徒会役員提案→各委員会活動へと実行委員会の活用が広がっていった。(また、令和2年度の新型コロナウイルス感染拡大による休校期間には、Google form を利用しオンラインで実行委員会参加者を募る活動も実施している。) これらのことから、実行委員会の「希望者が参加する意識の高さ＝より主体的な取り組み」であることの認知が進んでいることが考えられた。

さらに、令和元年度になると、生徒会活動だけではなく、学年行事である自然教室 (令和元年度2学年)、修学旅行 (令和2年度3学年) にもその活動が応用され、全員が参加できる実行委員会として教員・生徒と協働して生徒会活動の実行委員会を流用した活動が展開されることとなった。

これまでは「全員参加」は苦手意識を持つ生徒にとって「やらされる」感覚となることから、参加意欲や主体性が損なわれることが多く、そのため実行委員会では「希望制」をとっていた。

しかし、希望参加型の実行委員会が当たり前になると、全員参加型の実行委員会を計画する力量が向上すると同時に、参加する生徒の「実行委員会なら主体的に参加できる」という期待感の高まりにより、全員が参加することの抵抗感が減少していることがうかがえた。このことから、学校生活に実行委員会が根付くことで、自分で選択して参加する文化の形成が始まっていることが想定される。

5 まとめ

特別活動の大きな主題である「社会の形成者」の育成には生徒の主体性が重要なキーワードとなる。学校の諸活動に対し、生徒自身で主体的に活動を計画し仲間を募って活動を運営することができる場の保証が学校生活を豊かにし、生徒の成長を育むことができると考える。